

衣法一如

澤木興道

古來我が國に於て、お袈裟に對する信仰は非常に篤いものであつた。歴代の天皇の中でお袈裟をかけて入堂せられたり、或は天皇の御枕邊を安らげ奉る爲に高僧のお袈裟をかけた事がある。

今日尙正倉院に保存してある位である。更に八幡大菩薩も僧形で、宇佐八幡は傳教弘法と神語ありし時は、九條衣を搭て相見あり、といはれてゐる。孰實親王の畫し給ふ僧形の八幡大菩薩は九條衣の袈裟を披すといふ。

更に聖德太子以來お袈裟を搭けて政務をとる者も出で、後には武人までも陣中に袈裟をかけて出たものもある。

悲華經に「演_下在_二軍陣_一持_二袈裟少分_一恭敬尊重者向_レ敵得_レ勝事_下」とあるによつたものであらう。

更に人名に於ても袈裟の字を附するは皆袈裟の信仰から出るものである。然らば袈裟と宗乘とは如何なる關係にあるか、と言ふにそれは衣法一如の點である。

傳光錄の中に「第四十二祖、梁山和尚參_二持後同安_一安問曰、如何是衲衣下事、師無對、安曰學佛未_レ到_二這箇田地_一最苦汝問_レ我道、師問如何是衲衣下事、安曰密師乃大悟」とある。即ち「お袈裟をかけた身分と言ふものはどう言ふ事ですか」

といふ問に對して「密」と答へたのである。我々がお袈裟を搭けた身分、これ一體の公案である。我々が一生參ずるものはこのお袈裟をかけた身分である。如何なる高位、高官の上座に坐しても、お袈裟をかけた身であれば安心して坐し得るのである。このお袈裟に對する信仰が我々の全體であらねばならぬ。

佛々祖々は皆この信仰に生き、法衣を供養護持し來つたのである。

方服歌讚儀の卷頭に「廣大乎袈裟之德也、三世諸佛以爲防煩惱賊之鎧也。十方賢聖以爲渡生死海之筏也」とある。

「洞山大師問僧、甚麼最苦」即ち苦しい中でも最も苦しいものは何かと問ふたのである。

すると何日の時代にも擔板漢が居ると見えて、「地獄最苦」と答へた。

大師は「不然不明衣線下大事始是苦」と言はれた。袈裟につままれながら極樂は何處だと尋ねるやうでは一生涯かかつても行かすべき處に到達し得ないであらう。さうすれば我々はお袈裟を搭けるといふ事が一大成就であり、行きつく所まで行きつき得た譯である。お袈裟を搭けて満足出來ぬ事は最も苦しみであらねばならぬ。

賢愚經には「説於我滅後著三衣者有戒無戒共皆得涅槃無有遺餘」とある。即ちお袈裟は解脫服であり、無相福田衣である。

道元禪師は袈裟功德の卷に於て「われ邊地にうまれて末法にあふ、うらむべしといへども、佛々嫡々相承の衣法にあふたてまつる。いくそはくのよろこびとかせん、いづれの家門かわが正傳のごとく釋尊の衣法ともに正傳せる云々」と述べられてゐる。是正しく袈裟即佛法である。

丈六の釋迦が千尺の彌勒に衣を傳へて長からず短からず、といはれた。是實に無相の信衣であり、佛教それ自體を云ふのである。袈裟は畢竟佛法といふものゝ全面のありのままなる表現でなければならぬ。宇宙一杯に擴がつた廣大無邊のものである。大には方處を絶し細には無間に入るものである。是こそ解脱無相の心印であり悟そのものである。

六祖慧能禪師は黃梅山にて神秀上座の「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃」といふ偈の側に「菩提本非樹 明鏡亦非臺 本來無一物 何處惹塵埃」と記して遂に五祖弘忍禪師より夜牛に衣法を正傳せられた河を渡つて行く途中、神秀上座の徒追ひ來つて法衣を持ち去らんとした時六祖は「此衣表信可以力爭耶」と喝破せられた。その衣鉢を石上に置けば、法衣大磐石の如く重くして動かない。我々凡人の力をもつて争ふ事は到底不可能である。六祖の法衣は正に信衣であり、我々の信仰であり、生きた體驗であり悟そのものの表徴である。面山和尚二十五才の時の老梅庵に於ける偈に、

「一擔伽利裁縫全 從元非布亦非綿、青黃赤白有回互、尺短寸長垂正徧、糞掃堆輝先佛德、針縫上見萬翁傳」
威儀開展未來際、永爲人天大福田」といふのがある。かく見るならば袈裟を縫ふといふ事が既に一大事の成就でなければならぬ。一針一針が實に宗乘であり一針一針が永遠性をもち、一針一針が法の全露である。

即ち一針一針が行きつくべき處まで行きついた事である。「針々密々、頭角忽生、家風別々、異類中行」である。更に、衣財を割截することは即ち、著を割截するを意味する。執を割截することである。

情執を壊せなければ、いづれの布でも皆不清淨となり、愛著を割截すれば絹布も清淨となるのである。すると割、そ

れが宗乘であり一大事成就である。

「野鳥自啼、花自笑、岩下不干坐禪人」好惡を離れ、執著を離るゝ時、割截の義又自ら現前するのである。

默室禪師も「巍々たる青山、冉冉たる白雲、動靜然る所以にして然り」と述べられてゐる。即ち著すべからず執すべからず、不思議にして現する。此の點はよく／＼回向返照して自己のものとせねばならぬ。蓋し愛を割き執を斷するは誠に出離の要法であるからである。

古來法衣財體に就て「錦繡や、綾羅、緇絹は打捨つべし」とあり、殊に絹布は生物の生命を損する故にとあつて氎布を最清淨としたのである。道元禪師はこれに對して「その衣財、また絹布よろしきにしたかふてもちゐるかならずしも布は清淨なり、絹は不淨なるにあらず。絹をきらふて布をとる所見なし、わらふべし」と申されてゐる。即ち情執を壊せざれば、氎布と雖もまた不清淨なものとなる。好惡を離れ、憎愛を捨つる處に如法衣が現前するのである。

ある僧かつて古佛（平平古佛）に次のことを問ふた。「黃梅夜半の傳衣、これ布なりとせんや絹なりとせんや、畢竟してなにもなりとせんや」古佛の答に、「これ布にあらず、これ絹にあらず、知るべし袈裟は絹布にあらざる、これ佛道の玄訓なり」とある。

染色に就ては大莊嚴論に云く、「われ赤衣を著く珠に映して肉に似たり」涅槃經に云く「醉象わが弟子被服の赤色を見て、謂て是を血と呼ぶ。等」とある。道元禪師の「如來はつねに肉色の袈裟を御しましませり。これ袈裟色なり」と言はれる所以である。梵網戒經には「著る所の袈裟、みな壞色ならしめて道と相應ならん。」と記されてゐる。初祖相傳

の佛袈裟は青黑色である、即ち是西天の屈胸布である。

染色に於ても常に是を壞色となして、五欲の想を離れ貪愛を生ぜしめないようにしなければならぬ。是道元禪師が糞掃を上品清淨となされてゐる所以である。

袈裟の染色に於て如法色とされてゐるのは、青黒壞色と木蘭でこれを一般に三如法色と云つてゐる。

身心共に糞掃なれば是始て無相の福田であり、八萬四千の法門蘊の現前である。體色相應して如法衣となるのである更に量に就て、佛は塵々刹々の身であり、融三世間十身具足の舍那佛もあれば、相海身の須彌佛もあるが併し何れにしても袈裟は佛體と相應でなければならぬ。

道元禪師は袈裟功德の卷に「佛と人と身量はるかにことなり、人身ははかりつへし、佛身はつひにはかるべからず、このゆゑに、迦葉佛の袈裟、いま釋迦牟尼佛着しますに、長きにあらず、ひろきにあらず、いま釋迦牟尼佛の袈裟彌勒如來著しますに、みじかきにあらず、せはきにあらず、佛身の長短にあらざる道理、あきらかに觀見すべきなり」と述べられてゐる。即ち丈六の釋迦牟尼佛の袈裟が千尺の彌勒に傳へて短からず、せまからざるは何故か。袈裟即法であり、身につければ福田であるからである、即ち身心共に是れ糞掃衣にしてはじめて佛法が現前するのである。以上の體色量の三具足相應する端的、これ即ち針線貫通して文彩おのづから彰るゝのである。是こそ三十二相であり八十瑞好である。如是の體色量は、佛陀の三身であり三徳である。

大淨法門經には袈裟の事を去穢服と稱して、三惑五穢を除去するの義に用ひ、更に大集經には離染服と稱して煩惱雜

染を離るゝ義に使ひ、又賢愚經には出世服と稱して三惑を盡して界内外を出るの義に用ひてゐる。

或は無垢衣と稱し、離塵服と名け、或は消瘦服、蓮華服、間色服と稱し皆煩惱を割き、著を離るゝ義を持つてゐるのである。

道元禪師は「おほよそしるべし、袈裟はこれ諸佛の恭歸しますところなり、佛身なり、佛心なり、解脱服と稱し福田衣と稱し、無上衣と稱し、忍辱衣と稱し、如來衣と稱し、大慈大悲衣と稱し、勝幢衣と稱し、阿耨多羅三藐三菩提衣と稱す、まさにかくのごとく受持頂戴すべし」と申されてゐる。即ち袈裟は學人の拳頭であり眼睛でなければならぬ。

一四句偈であり、無句偈である。

我等はこの點をよく體得し、仰て披奉頂戴すべきである。

次に袈裟を研究するに就て、その参考書を擧げるならば、宗門に於ては正法眼藏の袈裟功德の卷、傳衣の卷を基とする事はいふまでもない。

これだけでは袈裟の研究資料としては未だ不十分である。即ち縫方、寸法、掛方、それ等の事が判然として居らぬ。明治時代に出た日本佛教全書の中に、法服叢書と言ふのが二冊ある。この中には、法服格正（默室良要禪師著）も入つてゐる。葛城の慈雲尊者全集の中にもやはり袈裟に關する書が二冊程ある。

其外、法服圖義略本、廣本、講解立談等がある。この法服圖義略本が宗門の法服格正に最も参考書となるものである。その上巻は圖入で説明され下巻には典據問答まで記入し染方等も非常に丁寧に示されてゐる。八事山の諦認律師の律

苑問辨といふ書が十卷ある。これは糞掃衣に就て細部に涉つて述べられてある。更に面山和尚の釋氏法衣訓といふものがある。その中心は袈裟功德に就てである。

先づ袈裟に就ては以上の經典藉を擧げて置く。尙それ等の典據考證は律門に依らねばならぬ。

經典では、心地觀經無垢稱品、悲華經、海龍王經、地藏十輪經、賢愚因緣經等に依ればよい。

【文責在役員】